⑯やがて、白い着物を着た葬列のものたちがやってくるのがちらちら見えはじめました。話し声も近くなりました。

語彙的・文法的意味・構造

白い着物を着た

〔葬列の者たちが ― やってくるのが〕 ―― 見え始めました。

主語的つきそい文

・やがて＝（副）①まもなく、そのうちに「―帰ってくるだろう」　②ほとんど。おおかた。もう。「彼が出ていってから、―一時間にもなる」　③それがそのまま。すなわち。（文語的な使い方）「嘘をつくことは、―堕落に通じる心である」

・葬列＝（体）①葬式に参加した人々の列「―に参加して、焼香した」　②葬式の行列　「―は、静かに進む」

・ちらちら＝（体）　①小さいものがひるがえりながら、飛び散るさま。「雪が―降る」「雪が―してきた」②小さいものがかすかにひらめく、光るさま。「漁り火が―とまたたく」　③すこしずつ、時々見えたり聞こえたりするさま。「彼の噂を―耳にする」「金歯が―のぞく」

・見え始めました…すがたをあらわすあわせ動詞。「見える」という動きを始める動きをあらわす。

指導の要領・留意点

・ちらちら―葬式の出る合図のかねが鳴ってから、しばらく待っていると、葬列の者たちがやってき始めた。葬列の者たちは、白い着物を着ているのである。いいお天気なので、葬列の者たちの白い着物が、ちらちら光って見え始めたのである。ごんが、村から葬列が墓地へ入ってくる道の方をじっと見続けているということがわかる。

・話し声も―葬列の者たちの話し声も近づいてきたのである。葬列の者たちは、兵十のおっかあのこと、兵十のこと、世間話などをしているのだろう。ごんには、話の内容ははっきりとは聞き取れなかったのだが、兵十のうちのだれが死んだのかが気になっているごんが、耳をこらして葬列の者たちが話しながら近づいてくるのを、じっと待っていることもわかる。ごんのいっしょうけんめいな気持ちが読みとれる。

・この二つの文で、葬列が近づいてきたことが、映像化できる。

⑱葬列は墓地へ入ってきました。　⑲人々が通ったあとには、ひがん花が、ふみおられていました。

・入ってきました…近づき態

・ふみ折られていました…結果の継続

葬列の人々によって
彼岸花が ――┼―― ふみ折られていました。　受け身のたちば
彼岸花を
葬列の人々が ――┼―― ふみ折りました。　しかけるたちば

・人々が通ったあとには　状況語的なつきそい文（場所）

＊ この「に格」の使い方が特殊だと思える。ねじれが見られる。⑫の文の「には」と同じ。

・葬列が、墓地へ入ってきて、ごんの目の前を通りすぎた。「葬列が墓地へ入ってきました。」と、「葬列が墓地へ入りました。」とを比較すると、ごんの一所懸命待っていた気持ちが読みとれよう。

・ごんが、人々が通ったあとに目をやると、ついさっきまで、赤いきれのように美しくさき続いていた彼岸花が、無惨にもふみ折られたいた。受け身の形で表されることによって、無惨という気持ちがわいてくる。これは、ごんの気持ちである。かわいそうだな、いたいたしいなという気持ちが、ごんにも感じられている。

⑳ごんはのびあがって見ました。21　兵十が、白いかみしもをつけて、いはいをささげています。22　いつもは、赤いさつまいもみたいな元気のいい顔が、きょうは何だかしおれていました。

23「ははん、死んだのは兵十のおっかあだ。」

ごんはそう思いながら、頭をひっこめました。

・のび上がる＝（動）つま先で立って、身長を高くする。「高い球をのびあがってとる。」

・かみしも＝（体）主として、江戸時代の武士の礼装の一つ。上半身につける袖のない肩衣と、同色の袴からなる。麻製を

・のび上がる―動作化させる。かくれながら名のだが、できるだけしっかり見たいというごんの気持ちがわかる。

・21 22は、のび上がってごんが見たなかみだ。21は、兵十のようすが描かれている。兵十が、葬礼用の白いかみしもを着けて、

最上とする。堅苦しいことのたとえに用いる。「ーを脱いで話をしよう」
・いはい＝（体）死んだ人の名、戒名を記して祭る木の札。「仏壇にーを安置する」「先祖のーを祭る」
・ささげる＝（動）①両手を上に伸ばして、品物を頭より高くして持つ。「脱いだ着物を捧げて、深い川を渡る」　②神仏、または、目上の人や尊敬している人に、物を差し上げる。「多年の研究になる著書を亡き先生にー」「神前に玉串をー」　③自分のいだいている真心、愛情などを相手に示す。注ぐ。「夫に愛情をー」
・なんだか＝陳述副詞。ごんの気持ちをあらわしている。
・しおれる＝（動）①草木などが水気がなくなってしぼむ。「花がしおれてしまった」　②人間が元気がなくなって、しょんぼりとなること。「お金を落としてー」

24　その晩、ごんは、穴の中で考えました。
「①　兵十のおっかあは、とこについていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。②　それで兵十がはりきり網をもち出したんだ。③　ところが、わしがいたずらをして、うなぎをとってきてしまった。④　だから兵十は、おっかあにうなぎを食べさせることができなかった。⑤　そのままおっかあは、死んじゃったにちがいない。⑥　ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいとおもいながら、死んだんだろう。⑦　ちょっ、あんないたずらをしなけりゃよかった。」

・床につく
(1)寝床に入る。寝る。就寝する。
(2)病気になって寝る。

・ちがいない…強い推量を表すむすび
おしはかりの文の述語は、むすびの「だろう」「らしい」「ようだ」「しれない」「ちがいない」をくみあわせて作ります。はっきりわかっていないことを知らせるときには、おしはかりの形になります。
・のだ…意味を強めるいいおわりのくっつき　＊既出解説
・死んじゃったにちがいない＝死んでしまったにちがいない
・死んだんだろう＝死んだのだろう
・だろう…推量を表すむすび

いはいをささげていることから、兵十が喪主であることがわかる。22 は 21 をさらにくわしくしている。いつもは、まるまるとした赤いさつまいもみたいな元気のいい顔なのに、今日の兵十ははなれたところから見ているごんにも、なんだかしょんぼりして元気がないように見えたのだ。
・そう…「思いながら」のなかみ。「　」で囲ませる。
・村の様子をよく知っているごんは、兵十の衣服、持ち物、表情などから、死んだのは、兵十のおっかあだと納得したので、頭を引っ込めたのだ。
・何でも疑問に思ったり、何でも知りたがったりするのがごんの性格なのだろうか。

・24には、墓地で、しおれている兵十を見て帰ったごんが、その晩、あなの中で、兵十のおっかあが死に至った理由を、自分が兵十のうなぎをとったことと関係づけて、自責の念にかられているようすが、考えた順に書かれている。
・①まず、兵十のおっかあのことを想像し、「うなぎが食べたい」と言ったにちがいないと、主観的に解釈する。
・②雨上がりのあの日、川にはりきり網を持ち出したのは、②のことがあったからだと断定する。
・③その結果、兵十がやっとつかまえたうなぎだったのに、そんなことも知らず、自分がいたずらでとってきてしまったと、自分の行為を考えている。
・④そのため、兵十は、とこについているおっかあにうなぎを食べさせることができなかったと、断定する。
・⑤兵十のおっかあは、とうとう、うなぎを食べないまま死んでしまったにちがいないと、主観的に解釈する。
・⑥兵十のおっかあが（ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたい）と思いながら死んだのだろうと、死に際のことまで想像する。
・⑦自分のしたいたずらのために、兵十のおっかあが、この世に未練を残して死んだのだろうと想像したごんは、生まれて初めて、自責の念にかられ、あんないたずらをしなければよかったと後悔したのである。
・ごんのこの後悔が、この作品の「おこり」となって、全編を引っぱっている。この気持ちから、ごんが兵十にのめり込んでいき、ついには、自分が死に至るという破局をむかえることになる。